

学習の調整を促すための指導と評価の一考察 —OPPシートの活用がメタ認知的方略の使用に及ぼす影響の検討—

和歌山市立岡崎小学校
教諭 川内 賢太郎

【要旨】

本研究では、主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の充実を図るという目的の下、学習の調整を促すという観点から OPPA の有用性を検討した。方法としては、OPPシートを用いた授業実践を行い、単元の前後でメタ認知的方略尺度への回答を求め、その結果を分析した。すると、筆者が設けた4つの視点に沿って児童が学習履歴の記述を行い、その記述に対して教師がフィードバックを行うというサイクルを繰り返すことが、児童にメタ認知的方略の使用を促す上で効果があると分かった。また、授業後の児童のOPPシートを基に主体的に学習に取り組む態度の評価を行った結果、その評価と児童のメタ認知的方略の使用との間には正の相関が見られた。これらのことから、OPPAは主体的に学習に取り組む態度の指導と評価を行う上で効果的であることが明らかになった。

【キーワード】

学習の調整、OPPA、指導と評価、主体的に学習に取り組む態度、メタ認知的方略

1 課題と目的

「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（以下、参考資料と略記）では、主体的に学習に取り組む態度を評価するに当たって「自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかといった意思的な側面を評価することが重要である」（※1）と述べられている。しかし、この認識はまだ十分に広がっているとは言えず、児童の性格や行動面の傾向を捉える評価がなされていることが多い。このような現状についての指摘は平成31年1月中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」においても明記されており、喫緊の課題となっている。

また、同報告において、主体的に学習に取り組む態度の評価とそれに基づく指導の改善を図るに当たって、メタ認知などの学習に関する自己調整にかかわるスキルが重視されるべきであると述べられている。メタ認知は、三宮（1998）において「認知に対する認知、すなわち、見る、聞く、書く、話す、理解する、覚える、考える、といった通常の認知活動をもう一段高いレベルから捉えた認知を指す。」（※2）と説明されている。また、同著において、自己調整学習は自分で自分の学習を対象化しコントロールする、メタ認知を働かせた学習という意味合いが強く、そのため、メタ認知をより良く働かせるような工夫、すなわちメタ認知的方略が重要な役割を果たすとされている。

このメタ認知の育成について、堀（2019）は認知科学の観点から、学習における認知過程の「内化」と「外化」が重要であると述べている。内化とは「自己の内部に物事や情報を取り入れて再構成する」ことであり、外化とは「思考や認知過程を外部に表現する」ことである。堀（2019）はこれらをスパイラル的に取り入れる活動を学習の中に設計し、学習者のメタ認知を育成していくための手法として、1枚ポートフォリオ評価：One Page Portfolio Assessment（以下、OPPAと略記）の有用性を提唱している。授業における成果を外化させ、それを評価し、さらには指導に生かすことで、学習内容の適切な内化につなげていく。そのようなサイクルを、1枚のシートを活用して授業の中に設計している。

そこで、本研究では、OPPAを取り入れた授業研究に取り組むことで「メタ認知の育成」と「主体的に学習に取り組む態度の指導と評価の充実」を図る。

2 方法

(1) 「外化」の働きに重点を置いたOPPシートの活用

ア OPPA

堀(2019)が提唱しているOPPAは、1つの単元を基にしたOPPシートを授業設計の段階で作成する。このOPPシートの基本構造は図1に示すとおり「単元タイトル」「学習前・後の本質的な問い」「学習履歴」「学習後の自己評価」からなる。学習者には、単元の導入と終末に、「本質的な問い」に対する考えを記述させる。また、授業の成果を毎時間学習の履歴として記述し、認知過程を外化させる

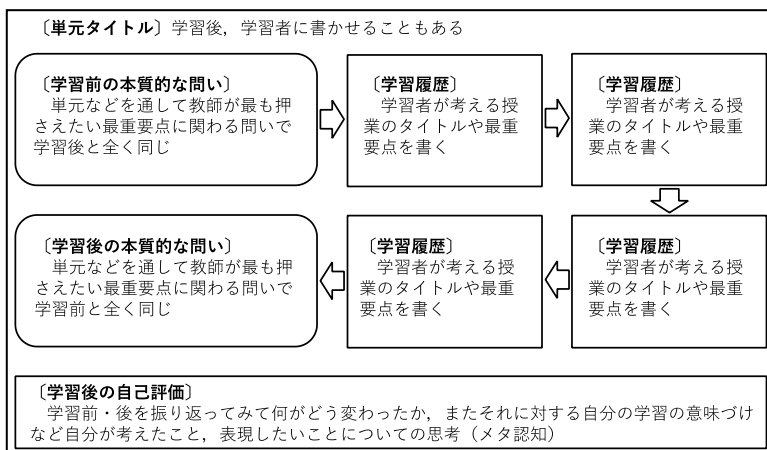


図1 OPPシートの基本構造 堀(2019)

ことで、学習状況の把握や学習の調整を促す。そして、OPPシートに表れている学習者の記述から学習状況を見取り、コメント等のフィードバックを行うことで、学習者に学習内容の適切な内化を促す。単元終末には自身の学習について自己評価させる時間を設ける。

イ 学習履歴の記述の視点について

一般的に行われる振り返り活動を例に挙げると、授業の感想に終始してしまい、その時間の学習を適切に外化できていない児童が少なくない。認知過程を俯瞰して捉えるための視点が与えられていないことが、その理由として考えられる。

三宮(1998)は、メタ認知に必要な思考の態度として、ものの見方・考え方に目を向けることを挙げている。自分自身が物事をどのように見たり考えたりしているかに着目することが必要であり、それがメタ認知の基本的方法であると述べている。

そこで、本研究では、学習履歴の記述の視点の一つに「見方・考え方」を設定する。学習指導要領において、見方・考え方は「各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方」と定義されており、授業改善の観点の一つとしても、教師が見方・考え方を働かせながら学ぶ児童の姿を想定し、その過程を重視することの必要性が大きく取り上げられている。また、学習履歴の記述の視点に設定することで、児童にもこの見方・考え方に目を向けさせ、三宮(1998)が挙げているメタ認知に必要な思考の態度を醸成していく。このように、教師と児童の双方が見方・考え方を意識することで、授業の中には、児童が「自分は物事をどのように見たり考えたりしているのだろう」と意識的に考える機会が増えていくと考えられる。教師の意図的な発問や板書、他の児童の発言等をきっかけや手がかりにして、児童に自身の学習を俯瞰して捉えさせたい。

さらに、「見方・考え方」を軸として「きっかけ」「結果」「見通し」を含めた4つの視点(表1)で学習履歴を記述させる。「きっかけ」には本時でその見方・考え方を働かせるに至ったきっかけとなる前時までの学習や、教師の問いかけや友達の発言、自身の抱いた疑問等を記述させる。「結果」には見方・考え方を働かせた結果、本時でできたことや分かったこと等を記述させる。また、「見通し」には本時の結果を受けて感じた課題等、次時以降のきっかけや見方・考え方につながる記述をさせる。

これら4つの視点に沿って学習履歴を蓄積させることで、1枚のシート上に児童の思考の流れやつながりがより明確に表れるようにする。それによって、児童が自分の学習を対象化しコントロールできるようになり、教師にとっても児童の学習を調整する様子が見取りやすくなると考える。

なお、学習履歴の記述に対しては、学習の進め方が単元で獲得を目指す資質・能力の獲得に結びつくようにフィードバックを行う。

表1 学習履歴記述の4つの視点

きっかけ	見方・考え方を働かせたきっかけ
見方・考え方	その時間に働かせた見方・考え方
結果	見方・考え方を働かせた結果
見通し	次時以降取り組んでいきたいこと

(2) 主体的に学習に取り組む態度の指導と評価を行う際に基準とするルーブリック

ア ルーブリックの作成

OPPシートを対象として、児童の主体的に学習に取り組む態度の評価を行うためのルーブリックを作成する。それを基準にして、児童一人一人に「A:よくできる」「B:できる」「C:がんばろう」の評価を行う。

参考資料国語編によると、主体的に学習に取り組む態度の評価基準には、「当該単元の具体的な言語活動」と「他の2観点において重点とする内容」を含めて、どのような「粘り強さ」と「学習の調整」を働かせる児童の姿を評価するのかが設定すると示されている。これを踏まえて、B基準とC基準を想定した上で、学習の調整が適切に資質・能力の獲得につながっている場合をA基準とする。その際、どの時間にどのような学習の調整を働かせてほしいかについてもOPPシートの作成を通して想定しておく。

イ 形成的評価の充実

ルーブリックを基にして、主体的に学習に取り組む態度の形成的評価の充実を図る。学習の調整が資質・能力の獲得に結びつくように、授業中の言葉掛けや学習履歴へのフィードバックを行うことで、その時間に働かせた学習方略の意味付けをしたり、今後働かせてほしい学習方略の使用を促したりする。また、学習を調整する様子が見られない児童には学習方略を例示する。

(3) 授業の概要

見方・考え方を意識しながら学ぶことで、児童は新たな文章に出会った際にも自分の中に蓄えてきた見方・考え方の中から働かせられそうなものを探し、使っていくことができるようになるだろう。働かせる見方・考え方を検討し、より良い解釈に辿り着こうとする姿は、まさに、物語文の学習における自らの学習を調整する姿の一つであると考え。そのため、本研究では表2にあるように国語科の物語文の単元を取り上げ、授業研究を行うこととする。

表2 授業について

期間	令和4年 10月21日～11月16日
対象	所属校 第6学年 26名
単元名	物語の魅力を表した ポップを作成しよう
教材名	「海のいのち」(東京書籍 『新しい国語6年』)

表3 指導事項を基に作成した単元の評価規準

知・技	①文章を音読したり朗読したりしている。(1)ケ)
思・判・表	①「書くこと」において、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(B(1)ウ) ②「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている(C(1)エ) ③「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。(C(1)オ)
主体的	①進んで、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりし、学習の見通しをもって自分の考えをまとめようとしている。

本単元は、「『海のいのち』の魅力を味わうために着目すべき叙述を見つけ、その魅力と着目してほしいところをポップで表現する」という単元終末のパフォーマンス課題に向けて、物語の解釈を児童同士で交流しながら学習を進めていくという構成にする。教科書に示されている指導事項から、本質的な問い「物語の魅力を見つけ、味わうにはどのような読み方をすれば良いか」と評価規準(表3)を設定し、それを基に構成を検討した。

第一次は、教材文のどこに着目し、どのような魅力を感じたのかについて、自分の考えをもつ時間、第二次は、友達と教材文に対する解釈を交流し、考えを広げたり深めたりする時間、第三次は、ポップの書き表し方を工夫し、パフォーマンス課題に取り組む時間と設定する。また、物語文の学習における見方・考え方やパフォーマンス課題の内容について共通理解を図るオリエンテーションの時間を単元の導入に設ける。単元の進捗に応じて児童に働かせてほしい学習の調整は表4のとおりである。

表4 児童に働かせてほしい学習の調整

第1次	読解の際に働かせる見方・考え方を検討する
第2次	友達との解釈の交流を通して、物語への解釈を広げたり深めたりする
第3次	パフォーマンス課題に向けて、書き表し方を試行錯誤する

(4) 質問紙調査

佐藤・新井(1998)は、小、中学生を対象にどの程度メタ認知の方略を使用しているかを測定する、メタ認知の方略尺度を作成している。本研究では、原尺度から特に授業場면을問うような9項目(表5)を使用し、単元前後で実施する。回答方法については「1:当てはまらない」から「4:当てはまる」の4件法とする。得られた結果は、児童のメタ認知の方略の使用に及ぼす影響や、主体的に学習に取り組む態度の評価との関連性についての分析に用いる。

表5 質問項目

1. 勉強している時に、やっていることが正しくできているかどうかを確かめますか。
2. 勉強を始める前に、これから何をどうやって勉強するかを考えますか。
3. 勉強する時は、どんな内容なのかを考えてから始めますか。
4. 勉強する時は、大切なところはどこかを考えながら勉強しますか。
5. 勉強する時は、最初に計画を立ててから始めますか。
6. 勉強する前に、これから何を勉強しなければならないかについて考えますか。
7. 勉強している時、たまに止まって、一度やったところを見直しますか。
8. 勉強している時、自分がわからないところはどこかを見つけようと思えますか。
9. 勉強している時は、やった内容を覚えているかどうかを確かめますか。

3 結果と考察

(1) メタ認知の方略の使用に及ぼす影響

事前、事後ともに回答を得られた25名のデータを分析対象とし、得点化した結果を表6にまとめた。その結果、事前調査の平均が20.84であったのに対し、事後調査の平均が29.28であることから、児童の中で「メタ認知の方略を使用している」という認識が大きく増していることが分かる。

表6 メタ認知の方略尺度の得点 n=25

	事前		事後	
メタ認知の方略尺度	平均	20.84	平均	29.28
	標準偏差	6.24	標準偏差	4.19

OPPシートの「学習後の自己評価」の記述には、「良かったところは、毎回見直しを書いたところ。理由は前の授業の時に次はこういうところを頑張ろうってなるから。」と、見直しへの記述が学習のプランニングや動機付けにつながったことや、「見方・考え方に、着目したことや考えたことを書いておくことによって、後で確認したい時とか他のところを読む時にも使えた」と、見方・考え方への記述を通して自身の思考をメタ認知し、一般化につなげたことが分かるものが見られた。また、「先生のコメントで友達に聞いてみたら、知りたいことを知れた。」と、学習履歴へのフィードバックが学習の方略の工夫につながったことが分かるものも見られた。

これらの記述からも、4つの視点を設けた学習履歴の記述が、児童のメタ認知の方略の使用を促す上で効果的な手立てであることが分かる。さらに、その記述に対して教師がフィードバックを行うことで、より児童の思考に沿った学習調整の手助けができたと考えられる。また、「学習後の自己評価」に、このような自身の認知過程を認知している記述が見られたことは、学習履歴の記述を繰り返し行った効果ではないかと考えている。

(2) OPPAを用いて行う主体的に学習に取り組む態度の評価の有用性

ア 評価の実際

表7のルーブリックを基準として、本単元における、児童の主体的に学習に取り組む態度の評価を行った。OPPシートと、作品の魅力を表現するポップを作成するというパフォーマンス課題を評価の対象とした。その結果、「A」が9名、「B」が17名、「C」に該当する児童はいないという評価になった。

表7 OPPシートから主体的に学習に取り組む態度を評価するルーブリック

調整を働かせて欲しい学習場面とその内容	評価	調整の方法
当該単元の具体的な言語活動 ・物語文の読解 ・友達との解釈の交流 ・パフォーマンス課題の作成	A	Bの学び方を通して ・より良い見方・考え方に発展させ、解釈につなげている ・物語を構造的に捉え、客観性のある解釈につなげている ・ポップ作りの目的に合った表現の工夫につなげている
	B	課題解決のため、必要に応じて ・友達の解釈を参考にしている ・見方・考え方を意識的に働かせている ・ポップへの書き表し方を試行錯誤している ・授業で学んだことを関係付けている ・次の学びにつなげようとしている
他の2観点において重点とする内容 ・解釈のための視点の工夫 ・解釈のための考え方の工夫 ・書き表し方の工夫	C	Bの姿がシートに表れておらず、学習の様子や教師との対話の中にもその姿が見られない

B評価としたのは、主に学習履歴の「きっかけ」や「見直し」に、「友達の解釈を参考にすること」や「こ

れまでの自身の学びからつなげて考えること」を行う様子が表れていた児童である。さらに、学習の調整を通して、見方・考え方をより良いものに発展させている様子や、解釈を深めている様子がOPPシートやパフォーマンス課題に表れている児童をA評価とした。

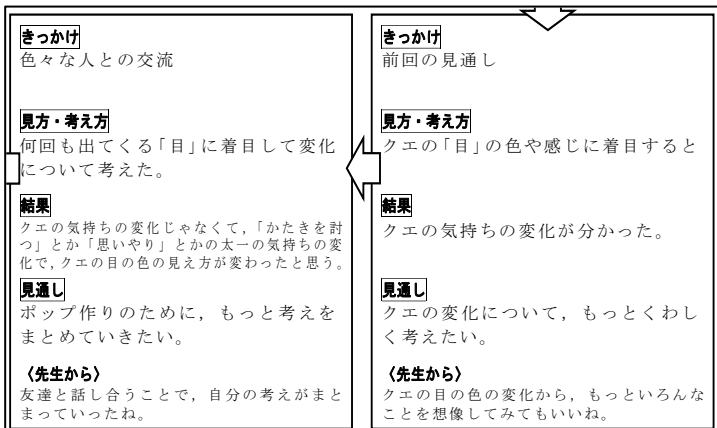


図2 児童の学習履歴（一部抜粋）

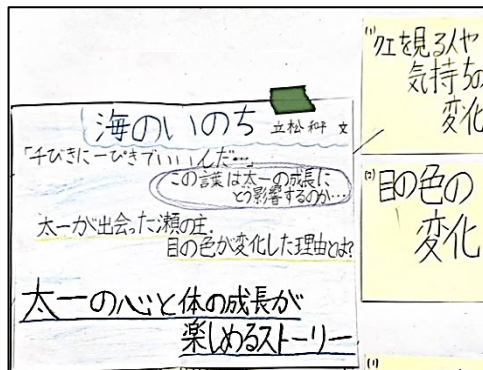


図3 児童が作成したポップ（一部抜粋）

A評価とした児童のOPPシートの一部を取り上げ、紹介する。(図2)この児童は、中心人物「太一」の対役である「クエ」の目の色に着目し、その意味について考えていた。最初は、この変化はクエ自身の気持ちの変化を表すと考えていたが、自身の解釈に納得しきれず、「もっとくわしく考えたい」と次時の学習に向けて見通しを立てていた。その後、友達と解釈を交流させるという学び方を通して、見方・考え方を発展させ、解釈を深めていったことが学習履歴から分かる。クエの描写の変化は、クエ自身の変化ではなく、クエを見る中心人物「太一」の気持ちの変化を表現したものであるという解釈に至ったのである。また、その気付きから得たことを、ポップを完成させるというパフォーマンス課題においても発揮し、物語の魅力として「太一」の成長が楽しめること、着目してほしいところとしてクエに対する太一の見方の変化を取り上げていた。(図3)

イ メタ認知的方略尺度と主体的に学習に取り組む態度の評価

Excelのデータ分析ツールを用いて、3(1)のメタ認知的方略尺度事後調査得点と前項の主体的に学習に取り組む態度の評価の結果との相関係数を求めた。(表8)その結果、主体的に学習に取り組む態度の評価と事後調査のメタ認知的方略尺度得点との間には、有意な正の相関が見られた。このことから、筆者が本単元で主体的に学習に取り組む態度を高く評価した児童は、メタ認知的方略尺度の得点も高い傾向にあることが分かる。

ここから、OPPAを通して行う主体的に学習に取り組む態度の評価には、妥当性があると考えられる。今回取り入れた4つの視点を基に、児童が記述した学習履歴には、メタ認知的方略の使用を通して自らの学習を調整し、見通しをもって学習を進めていこうとする児童の学び方が表れていたため、それを適切に評価することができたと考える。

表8 メタ認知的方略尺度事後調査得点と主体的に学習に取り組む態度の評価の相関係数

	主体的に学習に取り組む態度
メタ認知的方略尺度	0.41*

*p<.05

(3) OPPOを通して行う主体的に学習に取り組む態度の指導の効果

ア 主体的に学習に取り組む態度の評価と思考・判断・表現の評価

パフォーマンス課題を基に、思考・判断・表現の評価(注1)を行った結果、「A」が14名、「B」が12名、「C」に該当する児童はいないという評価になった。上記と同様の手順で、主体的に学習に取り組む態度の評価結果と思考・判断・表現の評価結果との相関係数

表9 主体的に学習に取り組む態度の評価と思考・判断・表現の評価の相関係数

	思考・判断・表現
主体的に学習に取り組む態度	0.72**

**p<.01

を求めたところ、2観点の評価間には強い正の相関が見られた。(表9)これは、児童の学習の調整が適切に思考力・判断力・表現力等の獲得に結びついた結果であると考え。中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」において、学習の調整に関する態度の評価は他の2観点との関係を十分に考慮した上で検討し、学習の調整がその獲得に結びつくように指導する必要があるとされている。これに照らし合わせると、「学習の調整が適切に資質・能力の獲得につながっている場合」をA評価と想定する評価の趣旨は妥当であり、そのような児童の育成を目指して行った本研究の指導は適切に働いたと考える。

イ 指導の実際

第1次では、学習履歴の記述に対して、働かせる見方・考え方を精査させるようなフィードバックを行うことで、児童が見方・考え方を意識的に働かせながら自分なりの解釈をもつことができるように促した。第2次では、必要に応じて友達との交流を調整の方法として用いることができるように、フィードバックを行った。学習履歴を基に、それぞれの児童が働かせている見方・考え方を把握した上で、他の児童の見方・考え方を紹介する等の支援が主な内容となった。そして、第3次では、ポップの作成に向けて書き表し方の工夫を意味付けたり、表現したいことに沿った工夫をしているかを再確認させたりするようなフィードバックを行った。自身の取組を振り返り、ポップ作りの目的に沿った書き表し方につなげていくように促した。

このように、OPPシート作成の際に想定した各授業場面での学習の調整を、主体的に学習に取り組む態度の評価ルーブリック(表7)に反映させ、フィードバックの際にも意識することで、児童一人一人に対し、学習の調整の手助けとなる指導を行うことができた。

(4) 課題及び今後の展望

今回の実践を行って、今後取り組む必要があると感じた課題を3つ述べる。

1つ目は、振り返りの苦手な児童にもメタ認知のスキルを獲得させるためのより良い手立てを確立することである。今回、メタ認知的方略尺度の得点が単元の前後で低下していた児童が1名見られた。この児童は、元々振り返りを書くことに苦手意識をもっていたこともあり、外化に難しさを感じていた。しかし一方で、OPPシートの「学習後の自己評価」には「もっと見通しを意識して勉強していけば良かった。見通しをもつことを続けていきたい。」と記述しており、メタ認知的方略の使用には前向きな様子が見られた。やはり、他の児童よりも学習履歴の記述に時間がかかってしまったことが、尺度得点に影響したのではないかと考えられる。授業中に、認知を自覚させる言葉かけ等の外化を促す手立てを積極的に講じていけば、児童が学習履歴を記述する際の手がかりとなり、また違う結果になっていたのかもしれない。支援の在り方やフィードバックの内容等について、継続的な実践の中で検討していくべきであると感じた。

2つ目は、単元計画の妥当性を検討し続けていくことである。OPPシートと主体的に学習に取り組む態度の評価ルーブリックの作成は、単元計画に沿って行われる。いつ、どのような学習の調整を期待するかは、育成を目指す資質・能力によるところが大きいためである。学習指導要領や参考資料、個々の児童の学習状況等を基に、妥当性のある単元の目標や評価規準を設定し、指導と評価の計画を綿密に立てていくほど、児童に働かせてほしい学習の調整をより具体的に想定することができる。さらには、主体的に学習に取り組む態度の評価ルーブリックやフィードバックの内容を充実させることにもつなげていくことができると考えている。学習の調整を促すためのフィードバックを、資質・能力の獲得に向けて一貫性のあるものにしていくためにも、綿密で妥当性のある単元計画を今後も意識していきたい。

3つ目に、教科に縛られない実践を行っていくことである。今回は国語科の授業を通して実践を行ったが、このOPPAは様々な教科、単元において導入できる手法である。メタ認知能力という教科汎用的に用いられるスキルの育成に当たっては、より多くの場において取り組み、学習者が思考の態度や方法を身に付けられるように働きかけていくべきだと

考える。また、評価の点でも、各教科、各単元に応じた主体的に学習に取り組む態度の評価基準を明確にすることができれば、筆者が提案する4つの視点を設けたOPPシートは、様々な教科、単元で、その評価材料としてはもちろん、形成的評価を充実させるものとして活用できると考えられる。今回提案したように、A基準を「学習の調整が適切に資質・能力の獲得につながっている場合」とし、参考資料を基に、様々な教科で評価の際に併用するルーブリックを作成、蓄積していくことで、体系的かつ教科等横断的に、主体的に学習に取り組む態度の指導と評価を行っていききたい。

冒頭でも述べたように、メタ認知という学習の自己調整に関わるスキルは、主体的に学習に取り組む態度の評価とそれに基づく指導の改善を図る上で非常に重要なものである。様々な教科において継続的な実践を行う中で、OPPシートの活用方法をより確かなものとし、メタ認知の育成、ひいては主体的に学習に取り組む態度の涵養を目指したい。

<注釈>

注1 パフォーマンス課題を基に思考・判断・表現の評価を行う際には、評価基準を基に筆者が作成した下記ルーブリックを基準とした。ルーブリックの3つの観点については、「見方・考え方」は評価基準の②と、「感想・考え」は③と、「書き表し方」は①と対応させて設定した。

	見方・考え方	感想・考え	書き表し方
A	見方・考え方を働かせて着目した、いくつかの叙述を関係付けながら、物語の世界や人物について想像している	Bを満たした上で、考えの根拠は誰が見ても理解できるものになっている	Bを満たした上で、伝えたい魅力や見方・考え方の中心が理解できるように書いている
B	見方・考え方を働かせて、物語の世界や人物について想像している	着目した部分を具体的に挙げて考えを書いている	物語から読み取ったことを、ポップ作りの目的に合わせた工夫を取り入れて書いている
C	物語の世界や人物について、自分なりに想像している	感想や考えを書いている	物語から読み取ったことを書いている

<引用文献>

- ※1 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』p.10 (2020)
- ※2 三宮真智子『メタ認知能力を伸ばす』日本科学教育学会 p.46 (1998)

<参考文献>

- ・国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』pp.32～33 (2020)
- ・小林康宏『見方・考え方スイッチ発問』東洋館出版社 p.36 (2021)
- ・佐藤純、新井邦二郎『学習方略の使用と達成目標及び原因帰属との関係』筑波大学心理学研究 pp.115～124 (1998)
- ・三宮真智子『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める』北大路書房 (2018)
- ・三宮真智子『メタ認知能力を伸ばす』日本科学教育学会 p.45 (1998)
- ・同上資料 p.46
- ・中央教育審議会『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』p.4 (2019)
- ・同上資料 p.10
- ・同上資料 p.11
- ・西岡加名恵『「逆向き設計」実践ガイドブック』日本標準 (2020)
- ・西岡加名恵『理解をもたらすカリキュラム設計「逆向き設計」の理論と方法』日本標準 (2012)
- ・バリー・J・ジーマン『自己調整学習の指導』北大路図書 (2008)
- ・堀哲夫『新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA』東洋館出版社 p.38 (2019)
- ・同上資料 pp.169～180
- ・松下佳代『パフォーマンス評価-児童の思考と表現を評価する-』日本標準 (2007)
- ・文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』日本文教出版 p.4 (2018)